

# 路地のあり方と移動——『日輪の翼』と『讃歌』

早川芳枝

『讃歌』は『日輪の翼』末尾より約二年後の時点から語り起こされており、前者は後者のいわば続編にあたる。それは『岬』『枯木灘』『地の果て至上の時』間などでも行われている方法であつて、決してこの二作品独自のものではない。しかし、『岬』から『枯木灘』に至る「秋幸三部作」や、『千年の愉楽』、『奇跡』に比して、『日輪の翼』と『讃歌』の評価

は高くない。例えば『日輪の翼』は「巧妙な設定であると感じさせられながらも、わたしはここに（中略）現代の作家における現実や自然との遮断をいわば「根」の喪失を痛感せざるを得なかつた」とする岡庭昇の評や「劇画的」「図式的」であるとする浅田彰氏の見解など、奇抜な設定と責種流離譚という物語の枠を突破していない筋書きに、批判的な見解が多い。

『日輪の翼』は、『地の果て至上の時』において路地が消滅した後の世界を描いており、路地物語の続編というべき位置にある。路地なき後の物語へと移行していく重要な作品であり、『土地なきサーガ』への挑戦を試みた作品でもある。

本論文においては今までさほど評価されることのなかつたこの二作品に着目し、中上健次が晩年目指そうとした路地なき後の物語の形も視野に入れつつ、両作品における路地の姿を明らかにしたい。また、作品中に見える移動がどのような意味を持つかを解明したいと考えている。

多くの論者が指摘するように、『秋幸三部作』において続編は続編以上の意味を持つ。それは常に前作品を批評する姿勢を有しており、決して単純な意味での続編にとどまらない。『岬』で秋幸は、実父への憎しみから異母妹とおほしき女と肉体関係を持つ。それは父を陵辱するという動機から引き起こされた行動であり、『岬』のクライマックスに置かれていくシーンである。しかし『枯木灘』において秋幸の実父浜村龍造は、二人の近親相姦を淡々と聞き、仕方のないこととして片づける。そして父殺しの代理として行われる異母弟殺害さえも龍造に決定的打撃を与えない。父を陵辱し、その座を脅かす挑戦的な行為を、龍造は受け止め、克服してしまうの

である。実父龍造は秋幸が乗り越えようとするところによつて、より超越した、乗り越えられぬ壁の如く描かれる。ところが、『地の果て至上の時』においては秋幸を自分の親と呼ぶなど、秋幸より一段低い立場に位置している。前作とは違つた位置から路地を巡る人間たちに視点を当て、別な面を描き出すことで前作を捉え直しているのである。

では、『讃歌』にそのような姿勢は皆無なのだろうか。そうではあるまい。『日輪の翼』結末近くに次のような一節がある。

老婆らに皇居へ曲りなりにも行き着く事が出来るすこぶるインチキな電車の乗り方を教え、ツヨシは東京での暮らし方に踏ん切りが着いたのだつた。冷凍トレーラーを長期に停める空地も要らなければ、澱んだ温い、いつも千年一日のような愉悅に波立つような路地も要らない。ただわき立っていればよい。

(IX 婆娑羅—東京)

『讃歌』にはただ沸き立っていることを余儀なくされた人間が、そのことに絶えられなくなる様が描かれている。名前を捨て、東京で性のサイボーグ「イーブ」として生きていくことを選択したツヨシは、チョン子にあてがわれるまま男女を問わず性交を繰り返す。金で買われるジゴロとして、ジムで

鍛えた肉体をへ白豚へ黒豚へ与える様は機械的であり、無機的な印象を与える。夜の新宿を舞台にした一種のポルノグラフィ―と誤解されかねないほど多くの性風俗描写にあふれているが、それらは決して官能的ではない。「サイボーグのセンサー」が、オンとオフを繰り返すように、機械的に性行為が行われるような印象を受ける。

しかし、イーブは完全にサイボーグになりきることが出来ない。時折「サイボーグのセンサー」は変調をきたす。それはイーブがイーブとなる以前の記憶がよみがえり、東京の言葉ではなく、紀州の路地の言葉が現れた時に顕著に起こる。イーブが『日輪の翼』のツヨシであることが明かされる場面(七章)の直前、回想シーンではない部分で初めてイーブが方言を使う。続いて中上の路地にはなじみ深い「夏芙蓉」と「金色の小鳥」が姿を現すのである。ター(田中さん)と再会したイーブは、上野公園の不忍池に向かう。いうまでもなく、路地開闢神話に登場する蓮池の東京版である。しかし、その蓮池は決して『日輪の翼』で語られたような始原の物語を誘いはしない。それがたとえ滑稽化されたアホな人の話であつたとしてもだ。ただ過去と現在の違いに苛立つイーブをなだめるものでしかない。三人の老婆たちと再会した後、メリーちゃんことコサノオバは、今はないその蓮池にまつわる思い出を語る。しかし老婆たちが語る蓮池もはや路地開闢

の物語とは結びつかない。「日輪の翼」で「路地開闢のアホな人」の話の舞台となる蓮池は「讃歌」に至って完全に始原の物語から切り離されるのである。このことについては後に詳述したい。

老婆たちを見つけて再び路地に戻るため、ジゴロ稼業を続けていたイーブは、トレーラーを買いに行く途上、ターに次のような宣言をする。

俺は今日でジゴロのイーブという名前から、昔のオバラに育てられたツヨシという名前に戻る。俺は死んだっての。さんじゃ。イーブという名前のサイボーグになつての。サイボーグからまたツヨシという人間に戻つた(二十二)

だが、東京でただわき立っていることをやめ、再び路地への帰還を果たそうとしても、戻るべき路地はもうない。そのことをターに指摘され、イーブはターともある種の決別をすることになる。そしてトレーラーと共に戻つたマンションからは、老婆たちの姿が消えていた。いくら探しても老婆たちの行方は皆目分らない。「日輪の翼」と全く同じことがここでも起こっているのである。老婆たちに突然立ち去られてしまったイーブは、すべての財産(そもそも老婆たちと共に路地に戻するために稼いだものだ)を賭に勝つた少年に譲り、ジ

ゴロ稼業を続けようとする。しかし、「讃歌」の終わり方で、イーブはチョン子と共にどこかへ向かおうとしている。それがどこであるか「讃歌」は語らない。「イーブは十時間も走れば路地に着くと思う。」(二十五)という一文があるものの、路地はもうないのである。

ここに「日輪の翼」とは異なる「讃歌」の路地観がはっきりと示されている。「日輪の翼」においてはあらゆる場所に路地があり、またあらゆる場所が路地となるという路地観が示されていた。「讃歌」においてはそうした遍在する路地さえない世界への旅立ちを宣言しているのである。

それでは、路地なき後に遍在する路地として現れてくるのはどのような場所だろうか。「日輪の翼」を見る限り、それは、A 冷凍トレーラーそのもの、B 冷凍トレーラーが停車している空き地、C 高速道路の三つに大別できる。

A 冷凍トレーラーそのもの

女らは蒲団に身を横たえたままだった。思い思いに、自分が深い海の底に沈んでいこうとしているとか、路地ごと空に飛んでいると思っていたが、(I 夏芙蓉 熊野)

間もなく冷凍トレーラーは、山から山に向つて翔びはじめる。山から山に向つてついた道を翔びつつづけていると

いうのに、老婆が思い出して話しはじめると、そこは路地になる。(Ⅰ)

老婆らの話は尽きなかった。老婆の誰も、これから車の中に閉ざされたまま、何日も何日もただ食つて寝てという暮らしをするのだと覚悟を決めたなら暇つぶしの話ぐらゐは幾つもあった。考えてみれば、路地でも同じような事をやっていたのだった。立ちのきが決つてから破れ目を補修しなくなった青年会館の奥で、御詠歌の練習に一人集まり二人集まりする間、老婆らは、それが嘘か本当か、詮議する事もなく見聞した事を話したし、路地の三叉路、天地の辻で、夏は日陰に、冬は日溜りに台を移動して、話しあつた。(Ⅱ 神の嫁―伊勢)

扉が閉められ、ロックがかけられ、すべてよしと確認するようにタンタンと外から叩く音がし、クラクションが鳴らされて発進すると、そこがどこであれ、どこへ向つて走るのであれ、冷凍トレーラーの荷台の薄暗がり路地になる。エンジンの音、チェーンが凍りついた雪道を噛む音が巻き起る風に混じつて、長旅になりそうだからと横になった老婆らの耳に響くと、また空を飛んでいるような音に変わる。こ

の路地とあの路地の違いは空を翔んでいるか、そうでないかの違いだった。サンノオバは音でわき返つた路地を思い出した。(Ⅷ 蝦夷―忠山)

B 冷凍トレーラーが停車している空き地

伊勢にいと山から山へ架つた道のむこうの路地が一層高い山の上、天の高みにあるようにみえた。(中略) サンノオバは、冷凍トレーラーを停めた暗闇の原っぱが路地と同じ天の高みにあるのだと思つた。(Ⅱ)

冷凍トレーラーに乗せた七人の老婆にも、ツヨシにも、路地から遠ざかる道はあるが、路地に帰りつく道はないと覚悟している。眼を転じてみれば冷凍トレーラーで行くところ、すべて純無垢の路地になった。(中略)

ツヨシは、一瞬、老婆らが空き地につくりあげた路地のようなものが壊されると思い足元にすり寄つた犬を蹴つた。(Ⅱ)

その空地についてすぐに、老婆らの足で歩いて十分の距離に銭湯がある事を見つけていたので、誰に頼らずとも毎日でも風呂は入れた。

何一つ不自由のない、それがそのまま路地の暮らしだと

いってよい諏訪の生活だった。

(IV 白鳥―諏訪)

そこを瀬田の唐橋付近でみつけた路地として仮設するなら、老婆らは、何のこだわりもなく、浮浪者の寝入っているそばで、後にして来た山に囲まれた路地でしたと同様に嘘か本当か分からない噂話の類を語り、つなぎあわせ、時をすごす。

(VI 唐橋―瀬田)

東京はどこにも冷凍トレーラーを長時間停めておく空地はなかった。老婆らがそこを拠点にして、出たり入ったり、寝たり起きたり、炊事をしたり洗濯をする路地のような場所、それがなかった。(IX)

### C 高速道路

老婆らは伊勢の空地に居るより高速道路のサービス・エリアの方が似合い、一人一人が生き返ったようだった。(中略) 老婆らは空地では聞かれなかった歓声をあげて水を流せば汚物の流れる便所に行つて用を足し、それが終わると七輪を取り出して火を起したり、洗車用の水道で米をとぎ、水を張ってオカイサンと飯をつくりにかかり物業をつくりにかかる。

(III 織姫―一宮)

一宮ともう一つの一宮をつなぐ冷凍トレーラーがあり、その中で繰り返した熊野の路地の話とヨシの披露した高速道路の話がある。サンノオバは目を撥ねる湖を見つめ、一宮と諏訪が上下に合わせ鏡になっている気がした。

(IV)

老婆らはツヨシの運転する冷凍トレーラーに乗つてきて高速道路のサービス・エリアにいる事を一瞬忘れ、路地において路地の中で取り交される符号のようなものを分らない若衆を小馬鹿にするように、「ドッコサノセはドッコイサノセやだ」と言う。(V 曼珠沙華―天の道) 扉が開かれ、ツヨシの取りつけたはしご台から降りてみて、老婆らはそこが案の定、山の上を走る高速道路のサービス・エリアなのを知り、住みなれた路地に戻つたように口々に安堵の声を洩らした。(VIII)

傍線を引いたように、熊野の路地以外の場がが路地として描かれる際は、老婆たちの行動や心中思惟が必ず関わってくる。また、冷凍トレーラーそのものが路地となる時は、必ず移動中であり、老婆らが荷台の中にいる時に限られていること、また、一宮のマンションや野辺地の木賃宿などは路地として

描かれていない事にも注意がいる。「伊勢での暮しから考えればスミコのマンションは天国のようなものだった。」(Ⅷ)と「野辺地で老婆らは満ち足りているように見えた。」(Ⅷ)とあるものの、そこが路地に変わることはない。路地はあくまで移動の途上に現れる通過する地点に出現するのであり、人が定住する家や建物が路地となることはない。確かに、行く先々に路地は出現し、あらゆる場所に路地は存在する。ただしその路地は常に移動し、流浪している。冷凍トレーラー内で交わされる会話として、熊野の路地と高速道路の話が並列されていることから、路地が移動する場として捉えられていることは明白である。東京に至り、路地が消滅してしまふのは、一行が移動をやめたからに他ならない。遍在する路地は移動することによって成り立っているのである。

それでは、「讃歌」において路地はどのように描かれているのだろうか。熊野の路地以外の地が路地と呼ばれるのはわずかに二例のみである。

車をビルの角で降りて、繁華街のはずれの一角に入り、入った途端、建物の群の何がイーブを刺激するのか、そこが路地だった気がし、イーブはその一角にうろつく男らがホモだから相手を見つげようとしてそこにいるのだと分かっているのに路地の男たちのような気がする。(Ⅱ)

日が暮れかかり、池の周囲から繁華街のネオンの明りが入り込み、蓮の葉の茂みに当たると、そこが路地の裏山のようになり、(中略)のぞかれると、誰もいない路地の裏山で密かに女と密会しているような錯覚が碎け、ターは仕方なく女を促して立ってホテルに行く。(七)

「日輪の翼」の路地は、移動はするがそこに所属し生活する場である。それに対し、「讃歌」に見える路地はイーブやターが所属することができない、排除される場として登場する。中上の路地世界になじみ深い「夏芙蓉」や「金色の小鳥」はしばしば姿を表すが、それらは路地の存在を示す目印たり得ていない。路地を路地たらしめていた老婆たちを失い、「夏芙蓉」も「金色の小鳥」も路地を構成するための求心力にはならない。かつて熊野にあった路地も、「日輪の翼」において道中至る所に現れた路地も、完全に復元不可能なものとなっている。それは老婆たちのオカイサンに対するこだわりからも裏付けられる。

冷凍トレーラーに乗り込む以前、まるでそこが道の果のように今となっては見える路地の中で、女らが今までそうして来たように齢相応の食い物を食べたい。(Ⅰ)

路地の中にいて、その齡まで他の風に当る事など夢にも思っていないかった。老婆らは食い馴れた物を食っていないと、自分が自分でないような気がする。(IV)

老婆たちは七輪と鍋を持参し、空き地であれ、サービス・エリアであれ所かまわずオカイサンをつくろうとする。このオカイサンを炊くという行為こそが路地を路地たらしめている力となっている。

「よかったワ、これでオカイサン食べられるヨ」

「生き返るよ」と口々に言う言葉を聞いていると、オカイサンが、路地の何から何までをつくっていたようにみえてくる。(II)

(サンノオバは―引用者注) 路地には常時、熱い炊きたてのオカイサンのような香ばしいえもいわれぬ味わいがあつたと思う。(VIII)

右の引用からもそれは明らかであるが、「讃歌」十九章でさらにはつきりと述べられる。

老婆らは路地を出る時、住みなれた土地を離れようと家を失くそうと、朝毎に濃く煮出した茶に米を入れて炊く茶粥があれば、流れていくどの土地であろうと路地になろうとそぶき、炭、七輪、なべを荷台に積み込み、うそぶいた通り行く先々で茶粥を作った。(中略)

東京でイーブが一角獣の性のサイボーグなら、茶粥ではなく味噌汁を飲むコサノオバも、食習慣を改造されたサイボーグだった。(一九)

オカイサンを炊かなくなるのは、東京に定住するのとはほぼ同時期である。コサノオバはオカイサンの塩加減を間違ひ、七輪も鍋も盗まれる。路地そのものであり、「路地の何から何までをつくっていた」オカイサンは、定住と同時に作れなくなってしまうのである。いや、「讃歌」二十章で「さしてもさしても塩辛で、いっぺんは米だけすくて食べたんや。オカイサンの味もせんようになった米、味気ないわの。」(二十)とジャンヌちゃん(マツノオバ)が述べるように、移動をやめると同時にオカイサンは味気ないものになってしまった。無論、そこが路地ではないからである。イーブのマンシヨンで炊かれるオカイサンが、半分は塩辛くて食べられないものになるのも、そこが完全な路地たり得ていないことの表れであると言える。老婆と共に移動し続けること、移動する先々

でオカイサンを炊くことが遍在する路地を支える条件なのである。その老婆が失われた時、路地はどのようなものに変貌するのか。そもそも、なぜ、老婆たちはツヨシたちから離れていったのだろうか。

『讃歌』二十三章で「イーブとターは路地の種子を庇護する為だけのように、路地の山や建物が壊される前に老婆らと共に、トレーラーを駆って抜け出た。」(二十三)と回想されるようにトレーラーは路地そのものであり、また、胎児をはぐくむ子宮でもある。それは「そのうち自分らが冷凍トレーラーの腹に身籠られた子のように思えてくる。」(II)という表現や、関ヶ原サービス・エリア付近のトラックターミナルで、荷台の戸を開け放ち、太陽の光にさらす場面からも裏付けられる。サンノオバは「お日さんで身籠ったらえらい事じやど」(V)と開け放たれた荷台を女性器にたとえている。即ち、七人の老婆は冷凍トレーラーが身籠もった子であり、路地の種なのである。その路地の種は東京に落ちた。だからこそ、路地の種を運んできた「イーブとターの二人に行き場がない」(二十三)のである。

この七人の老婆には、「千年の愉楽」のオリユウノオバのように路地の開闢から消滅後の未来を語るほどの、時間に対する超越性もっていない。老婆たちによって語られる物語は、過去に遡るか横にただ広がるのみである。路地の終末に

あつてただ来し方と今ここを見つめるしかない。四方田犬彦氏が「貴種と転生」<sup>（註）</sup>で指摘する通り、ここで語られる路地の開闢神話はイザナギイザナミによる国生み神話の変形である。よそから流れ着いた夫婦が蓮池そばに住み着き、奇形児を産んだ。その子は五歳の時に池でおぼれ死んだ。この子こそ国生みに失敗して生まれたヒルコの変形にほかならない。老婆たちの話の中で、この夫婦は博奕をするように山を焼いて畑を作ったアホな人という事になってしまふ。ツヨシの出生もまた、老婆たちの語りによっていくつもの尾ひれが付き、人間とは思えない大きさの未熟児だったと語られる。現実の路地は消え、その路地から遠ざかるほど路地がありありと浮かんてくるのは、老婆たちの語りの力に他ならない。しかし、話者の多さからそれはどんどん誇張され、現実離れし、ついには一笑に付されかねない滑稽なものになってしまふ。

この路地の持つ性質が、現代社会とは決して相容れない、独自のものである事は随所に見て取れる。そもそも移動する路地であるトレーラーは、ツヨシが勤務先の運送会社から無断借用したもので、事実上の盗品である。トレーラーに書かれていた会社名はペンキで消され、違法な改造を施し、さらに荷台に人を乗せるという三重の違法行為を行っている。しかしツヨシは「老婆らの気持ちに合わせて、次々としてきた事が、無届欠勤とか冷凍トレーラーの窃盗とか車体改造とか、

ろくでもない事に該当するのに、老婆らの姿を見、振る舞いをみていると、ごく自然な事のような気がする。」(Ⅱ)のである。存在そのものが違法であるのに、いや、違法である事が存在意義であるからこそ、旅の首謀者であるツヨシにさしたる罪悪感はない。それ故、一行に安住できる地はないのである。この冷凍トレーラーに形を変えた路地は、移動し続ける事でしか存続する方法はない。冷凍トレーラーを持ったまま定住する事は不可能である。

伊勢・唐橋では駐車違反のために退去を余儀なくされ、諏訪では豪雨、出羽・恐山では雪の為にその地を立ち去っている。せかされることなく落ち着いていられるのは「天の道」即ち高速道路のサービス・エリアやトラックターミナルといった移動する為の場所だけである。無論、完全に安心できるわけではない。トレーラーの荷台に老婆たちが居る限り危険はつきまとう。恵那のサービス・エリアでは男に違法性を指摘されている。また、伊勢、龍飛岬でトレーラーで暮らす老婆たちは乞食とののしられており、東京ではプーターローと呼ばれる。ツヨシは唐橋近くの公園、銀座の小さなビルの前で老婆と浮浪者が接近する事を好ましくないと考えるが、売春グループを組織している『ワコー』の客や、女浮浪者のヨシとあつという間に仲良くなる彼女たちは、むしろこうしたアウトローの側にいる。

そして老婆たちがトレーラーを捨て、姿をくらましてしまふ事は、路地という根拠を捨て、やがて日本という国のアウトローへ変化すると既に暗示しているように思われる。老婆たちは、オリユウノオバ亡き後の路地に残された最後の語り部であり、巫女的な存在であった。しかし彼女たちは路地の語り部としての役割を捨てた。天皇との一体化を望み、異郷である東京で死ぬ事を望んだのである。

特にサンノオバは、本宮の血を受けていたから、代々天子様の毒味役で、宮中に召されたのが明治の頃までであったのを知っていて、頭の中で畏れ多いと分かっているしそんな事は決してしないと思っていたのに、育つのが育たないのか分からなかった赤子のツヨシに豆や芋を口で噛んで搗りつぶして食べさせたように、天子様にも毒味役としてそうしてきた気がしているので、天子様の為ならいつでも矢盾になつて犠牲をいとわない誇りがむくむくと湧き出てくる(Ⅸ)

冷凍トレーラーを停めたのが日比谷公園の脇だったから、老婆らは朝から夜まで皇居を眼で見、天子様の体温の伝わる距離に居つづけられると喜び、早朝集まつてきてジョギングをしたり体操をしたりする者らの脇を抜けて

て掃除をし、心の底から満ち足りているようだった。

(IX)

「天子様のそばにおつてオカイサン食べると、皇居の中で天子様までオカイサン食べてる氣して、音聞こえてくるかも分かんと言つたの。」(IX)

右に示す通り、「日輪の翼」において老婆たちは天皇の側近くで共に同じものを食べるといふ幻想を見ている。あたかも新嘗祭における神との共食を思わせる場面である。老婆たちにとつての神は「天子様」であり、「路地開關のアホな人」ではない。彼女たちが語ってきた路地の神話は「天子様」の前では語られる価値のないものとして葬り去られてしまふ。

門の向うに日より眩しい人が居て、サンノオバが見聞きしたものを鉄さびてしゃがれてしまった声で話し出すのに耳をそばだて待つていてくれる氣がする。サンノオバは胸がいつぱいになる。まるで年若い頃男に捨てられた時の氣持ちのように、熊野の一等低い山の裏の路地に何千年も棲んで味わつた悲しさ、ただ日の温もりを恋うて、日の為なら矢盾ともなり命の一つや二つの犠牲など厭わない氣持ちを抱きつづけて来た、と直に訴えたかつたが、

声が長旅で鉄さびて、言葉が物重く、くだくだしく物語つてしまふと畏れ、ただ幸くとしかつぶやけない。(IX)

老婆たちは「天子様」の前で沈黙することを選んだのである。それは同時に、路地という物語が解体され、「天子様」を戴く日本という国に還元されてしまふことを意味する。もはや彼女たちは路地のオバではあり得ない。住む場所を失つた放浪者でしかない。語るべき物語が解体還元されてしまつた後、彼女たちは自らも解体還元されることで「天子様」と一体になることを望む。そのことは「讃歌」において、コサノオバからターに、ターからツヨシに語られている。

「吾背ら若い衆に、天子様のおるここへ連れて来てもろたのに、吾背らにいつまでも寄りかかつておられんと皆で言いおおてね、オバらだけでひとかたまりになつて、ずっとおつただけじゃのに」(十九)

「俺やおまえは、東京で迷い子にしてしもたと思つたが、オバら自分らで蒸発したんじゃ。捜されるの迷惑に思つた。(中略)天子様のおるここで死にたいと思つたんじゃよ。天子様のおるここでブラブラ乞食しながら暮らしたいと願とるんじゃよ」(二十四)

繰り返しになるが、老婆たちが語る物語（それは路地と言いつてもできる）は天皇が象徴する日本に吸収・還元されてしまったのである。古代天皇家が古事記・日本書紀で行ったこと、即ち各氏族の始原の物語を掌握し、それによって支配体制の確立をはかるということが『日輪の翼』の結末に重ね合わされているのではないか。

『讃歌』で再び登場する三人の老婆は皇居を清掃する為のほうきを求め、「天子様」という言葉を口にするが、決して路地開闢神話を語らない。不忍池は路地の拡張で埋め立てられた、あの蓮池の役割を果たさない。東京にあるものは何もかもが模造品なのだ。サイボーグのイーブも路地において、いや、老婆たちにとつて英雄だったツヨシの模造品である。路地の根柢である老婆を失った時、彼もまたジゴロというアウトローへの変化を余儀なくされる。異端が異端として存在できる路地は消滅してしまつたのであり、ツヨシがツヨシとして、オバがオバとして存在する事は出来ない。

前掲の文芸時評で岡庭昇氏が「しかし、彼らが（作家が）ほんとうに路地から出たのか、どうか。じつはそのことに決定的な問題が残されてしまつたのではないか。」と指摘されているのは正鵠を得ており、『讃歌』に至るまでツヨシも作者も

路地を出てはいるが、心は路地から離れていない。老婆たちは女乞食から昔のような路地のオバに戻れない事を知っていた。だからこそ再び姿をくらましたのである。ツヨシがそれを理解したのはその後の事だ。彼女たちは残された時間を現代の乞食者として「天子様」とその都である東京を言祝ぎ続けるのだろうか。乞食者は各地を遍歴し、所作と共に祝福の言葉を唱えて報酬を得、時に物乞いをしていたと考えられる者たちである。乞食は乞食者に通じ、乞食者のごとき巡業する芸人は一種の被差別者として扱われていた。そのことを作者は意識していたはずである。各地で御詠歌を唱え、きょうだい心中を振り付きで踊る姿や、デパート地下にある食料品売り場で試食した食品をほめてまわる様にその片鱗が伺える。

老婆を失い、朋輩のター（田中さん）と別れる事で、ツヨシは完全に路地を抜け、外の世界へと出て行くことになる。その傍らにチョン子がいることは一部分が同時期に書かれている作品、『異族』との関わりからも注目し値する。また、同作品を視野に入れる以上、「図式的」と非難を受けた『日輪の翼』の図式を考える必要がある。前掲の共同討議において浅田氏が指摘するように「あの物語は極めて図式的で、日本中の周縁をめぐったあと、空虚な中心としての皇居の前で老婆たちが消えていく」のである。周縁を巡るといふ行為は記紀・風土記にしばしば見られるもので、具体的な地名

を挙げながら登場人物を移動させることで王権の版図を示す役割を担う。『日輪の翼』においてツヨシたち一行は熊野を出発し、富山から龍飛岬、恐山、東京と北海道を除く東日本をほぼ移動範囲の中に収めている。この長距離移動は神武東征の焼き直しと見られる向きもあるが、『讚歌』を視野に入れる限りむしろヤマトタケルの平定物語に近い。自ら平定した土地にとどまることを許されず、白鳥になって去っていく姿は、『讚歌』の結末でどこかへ去っていかうとするイーブのそれと重なる。とりわけ古事記の平定伝承に見える周縁遍歴は、異端として排除される反乱者や皇統からの離脱者と共に語られることが多い。そのような存在を周縁的な地と結びつけて語ること、天皇は中央にしながら大きな支配力を持つ存在として印象づけられる。これに対し風土記は、しばしば外部からやってきて国内を巡幸する天皇を描く。記紀で異端者として周縁に追いやられるヤマトタケルが、(父景行天皇に疎まれ、天皇になることができない点では彼も異端者である)風土記では巡幸する王として描かれるように、異端者と王は紙一重である。異端者は異端であるが故に王となる資格を秘めている。現代社会における異端者と言うべきツヨシ一行は、周縁の崖つぶちをなぞるように本州東部の海岸沿いを巡っている。だが、その移動範囲の中に、北海道は含まれていない。当時冷凍トレーラーで北海道まで渡れなかったか

らではないはずだ。それはおそらくアイヌというもう一つの被差別者たちに関わる問題だろう。彼らにとって北海道は周縁の向こう、つまり外部として描かれているのである。

北海道を除く東日本を巡り、路地の始原を語る老婆たちを皇居前で失った、イーブでありツヨシである人間はどこへ向かうか。おそらく、かつて倭と呼ばれていた日本の、外部であるはずだ。在日外国人であるチョン子がなぜイーブを東京から連れ出したのか。なぜイーブの道連れとして選ばれたのか。おそらく、路地が市民社会の外部であるように、在日外国人も日本における外部であるからだろう。その点はアイヌ民族も共通している。だからツヨシたちの行程に北海道は含まれてこない。日本と呼ばれる土地に居住はするものの、日本とは異なる文化的、歴史的バックボーンを有する者たちの土地である。

路地という社会の周縁を舞台に小説を書き続けた中上は、異端とされるものの可能性を理解していた。日本という枠の中にありながら周縁部分に位置するもう一つの枠。それが路地であり、アイヌのコタンであり外国人街だ。日本にありながら日本を外側から見ることが出来る者たちの住む場所である。そうした者たちと連帯関係を結び、アジアへと向かっていくのが「異族」だ。

舞台を日本の外へ広げていくこと、それは常に異端者の立

場に立つことに他ならない。そしてそのことは同時に、自分が初代となる新たな歴史、物語を築く可能性を持ち続けることでもある。少年歌手半蔵二世のように出自を隠蔽し、何食わぬ顔で正統側に紛れているのではなく、自分とそれを取り巻く歴史を引き受け、堂々と外に出て行くこと。それが作者中上の姿勢であり、決意であるに違いない。彼は日本という国を相対化しうる出自と知性を有していた希有な作家であり、だからこそ日本神話に対置する路地の神話を築き上げることが出来たのである。(了)

#### 補注

注① 岡庭昇「文芸時評」『図書新聞』一九八四年三月三日

注② 「中上健次を巡って」双系性とエクリチュール」

(浅田彰・柄谷行人・蓮實重彦・渡部直巳)による共同討議

『批評空間』一九八四年一月

注③ いとうせいこう「移動のサーガ／サーガの移動」

小学館文庫版『日輪の翼』(一九九九年五月)所収

注④ 四方田犬彦「彷徨する兄弟」『貴種と転生』(一九九六年八月

新潮社)所収

※ 作品の引用はすべて初出誌によった。ただし、『讃歌』については引用元を示す都合上、初出にはない章番号を全集に従

って付加した。

※ 引用中の傍線はすべて引用者が加えたものである。

#### 引用部分初出一覧

日輪の翼

「Ⅰ 夏芙蓉・熊野」から「Ⅲ 織姫―一宮」まで

『新潮』一九八四年一月 八十一卷一号

「Ⅳ 白鳥―諏訪」から「Ⅹ 婆娑婆羅―東京」まで

『新潮』一九八四年三月八十一卷三号

#### 讃歌

「Ⅰ」『文学界』一九八七年七月四十一卷七号

「Ⅶ」『文学界』一九八八年一月 四十二卷一号

「Ⅰ九」『文学界』一九八八年十一月 四十二卷十一号

「Ⅱ〇」『文学界』一九八九年二月 四十三卷一号

「Ⅱ三」『文学界』一九八九年八月 四十三卷八号

「Ⅱ四」『二十五』

『文学界』一九八九年十月 四十三卷十号

(本学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程一年)